

日野ひかり幼稚園ファミリー通信

親子の対話で学びの土台を作る 「忙しくてもできる対話の絶大な効果」

幼児期は大切な時期。自分でできることが増えてくると、子どもの学びも気になってきます。しかし、心に余白がなくなるほどの詰め込み過ぎには要注意。

今大切なのは、学びの土台をつくること。子どもを急いで前進させることではなく、子どもの興味、関心に親が付き合うことが大切です。子ども自身が「おもしろい!」「不思議!」と感じる経験こそが、その後の学びの土台となるからです。ここで絶大な効果を発揮するのが「対話」です。忙しい日常でも簡単に取り入れられる対話の工夫について考えていきましょう。

幼児期に育つ「見えない力(非認知能力)」とは

「ひらがなが読めるようになった」「数が数えられるようになった」など、できなかったことができるようになるのは、子どもにとつて嬉しい経験です。また、英検や水泳の級などわかりやすい目標があれば、子どもは努力を重ねます。しかし、ここでは親の向き合い方が問われます。親がどう関わるかによって、「できるようになった」先が、大きく変わってくるからです。

「あ、それは違う。間違えないように!」

「全部できたね、合格!」

「〇〇ちゃんは水泳の級が上がったみたいよ。あなたも頑張つて!」

例えば、親が成果だけを見る評価者となってしまうと、子どもの中では「お父さん・お母さんのために成果をだすこと」が、頑張りの目的となってしまう。

「楽しく取り組んでいたね!」

「気持ちを切り替えて、最後までやり遂げたね!」

「自分でやると決めたこと、継続できているね!」

他方、子どもの取り組みの様子を見て、その過程に言葉を添えるよう意識すれば、自分を信じる力、立ち直る力、継続する力など、目には見えにくいけれども、とても大切な力が育ちます。このような力のことを、非認知能力と言います。学びの土台となる力です。

ここで鍵になるのは親子の「対話」です。何か特別な経験をさせなくても、日常のやり取りを意識するだけで、子どもの経験の意味が変わります。

対話を意識すれば、子どもの「今ここ」が見えてきます。親主導を離れ、子どもに合わせた関わりができるようになります。

対話を通して、子どもは「自ら考え」「自分の言葉で表現する」経験を積むことができます。

対話のタイミングを探ろうとすれば、自ずと「取り組みの過程」に目が向くようになります。

つまり、対話することで、学びの土台が作られるということです。

駄々をこねる子ども、何とやってあげられさせますか?

公園の一角にターザンロープという遊具を見つけた5歳の息子。でもそれは、6歳からしかできません。息子に説明したら、「やりたい! やりたい! やりたい!」と大声で言い出しました。

なんとかあきらめさせるために、あなたならまず最初に何と言いますか?

A だめなものはだめです

B そうかやりたいんだね。面白そうだもんね

C 6歳と書いてあるから、来年やれるよ

どれが正しいか、ではなく、実際問題自分だったら……と考えて答えください。……選びましたか?

A ..「だめなものはだめです」を選んだ場合

この言い方には、子どもの気持ちへの共感が一切ありませんよね。取り付く島もない、鉄の壁という感じですね。

いつもこのように気持ちを受け止めてもらえず跳ね返されてばかりだと、子どもは「うちの親は話にならない」「何を言ってもだめだ」と思うようになります。

B ..「そうかやりたいんだね。面白そうだもんね」を選んだ場合。

最終的にはあきらめさせなければならぬにしても、いきなり門前払いするのではなく、まずはこのように子どもの気持ちを受け止めて、共感してあげることが大切です。

私はこれを「イエス、イエス、バット (Yes, Yes, But)」と呼んでいます。「そうだね、やりたいね (イエス、イエス)」。でも(バット)無理だよ」というわけです。このように「そうだね (イエス)」と言ってもらえることで、子どもはやりたい気持ちを受け止めてもらえた、共感してもらえた、ある程度満足できます。

C ..「6歳と書いてあるから、来年やれるよ」を選んだ場合

理由をきちんと伝えてるので、Aよりはいいです。でも、もう少し子どもの気持ちを受け止めて、共感してあげてほしいなと思います。



よく「だめなものはだめと教えることが大事」と言われます。それはその通りなのですが、大事なものは、その言い方、伝え方、諭し方です。いくら正しいことでも、言い方に納得できないときは、受け入れられないものです。それは大人でも子ども同じです。ですから、まずは、本人の気持ちに共感してあげて、わかってあげること。これがとても大事です。